

■研究調査レビュー

多禰・掖玖両嶋と日本古代王権

糸尾 達哉（鹿児島大学法文学部）

日本書紀によれば、天武天皇の11年(683)7月、多禰（たね・種子島）の人々と掖玖（やく・屋久島）の人々が阿麻彌（あまみ・美大島）の人々とともに、天皇より禄を賜った。これらの人々は九州南部の隼人の一団と共に上京してきた人々である。この隼人たちはその後、飛鳥寺西方の広場で多くの見物の視線を浴びながら王権からの饗応を受けた。その饗応の場にはおそらく上記三嶋の人々もいたであろう。

小稿では、上記三嶋のうち、多禰と掖玖について取り上げ、この二嶋と大和王権との関係について憶測を加えてみようと思う。

さて、上記の飛鳥寺西方の広場での饗応について、永山修一氏は「壬申の乱に勝利して絶大な力をふるう天武天皇のもとで、唐の律令制度を手本に中央集権的な国家体制の建設を進めていた政府は、このような朝貢を行わせることに、政府の支配範囲の広がりようを示すとともに、天皇の徳の高さをも示すという効果を期待していた」と述べている(原口泉ほか『鹿児島県の歴史』)。

たしかに、7世紀後半の天武天皇の時代は、唐を除く外国との交流が盛んであった。それは書紀においては、日本と諸外国との朝貢関係として叙述されている。主要な記事を列記しておこう。

天武2年(673) 閏6月

A 耽羅、王子久麻藝・都羅・宇麻らを遣わして、朝貢す。

B 新羅、韓阿浪金承元・阿浪金祇山・大舍霜雪らを遣して、騰極を賀せしむ。あわせて、一吉浪金薩儒・韓奈末金池山らを遣わして、先皇の喪を弔わしむ。

あるいは云わく、調使と。

” 8月

C 高麗、上位頭大兄邯子・前部大碩干らを遣わして、朝貢す。

天武4年(675) 2月

D 新羅、王子忠元・大監級金比蘇・大監奈末金天沖・第監大奈麻朴武摩・第監大舍金洛水らを遣わして、調進る。

” 3月

E 高麗、大兄富干・大兄多武らを遣わして、朝貢す。

F 新羅、級浪朴勤修・大奈末金美賀を遣わして、調進る。

” 7月

G 小錦上大伴連国麻呂を大使となし、小錦下三宅吉士入石を副使として、新羅に遣わす。

” 8月

H 耽羅の調使王子久麻伎、筑紫に泊まれり。

” 9月

I 耽羅の王姑如、難波に到る。

天武5年(676) 11月

J 新羅、沙浪金清平を遣わして、政を請さしむ。あわせて汲浪金好儒・弟監大舍金欽吉らを遣わして、調進る。

肅慎七人、清平らに従いて至れり。

K 高麗、大使後部主簿阿于・副使前部大兄徳富を遣わして、朝貢す。

天武6年(677) 5月

L 新羅人阿浪朴刺破・従人三口・僧三人、血直嶋に漂着せり。

” 8月

M 耽羅、王子都羅を遣わして、朝貢す。

天武7年(678)

N新羅の送使奈末加良井山・奈末金紅世、筑紫に到りて、曰く「新羅の王、汲漡金消勿・大奈末金世世らを遣わして、当年の調を貢上す。仍りて、臣井山を遣わして、消勿らを送らしむ。俱に暴風に海中に逢う。もって、消勿ら、皆散れて、ゆく所を知らず。唯井山のみ、僅かに岸に着くことを得たり」と。しかれども、消勿ら遂に来たらず。

天武8年(679) 2月

O高麗、上部大相桓父・下部大相師需婁らを遣わして、朝貢す。

〃 10月

P新羅、阿漡金項那・沙漡薩蘂生を遣わして、朝貢す。

天武9年(680) 5月

Q高麗、南部大使卯問・西部大兄俊徳らを遣わして、朝貢す。

〃 11月

R新羅、沙漡金若弼・大奈末金原升を遣わして、調進る。すなわち、習言者三人、若弼に従いて至れり。

天武10年(681) 7月

S小錦下采女臣竹羅をもって大使となし、当摩公楯をもって小使となして、新羅国に遣わす。

T小錦下佐伯連広足をもって大使となし、小墾田臣麻呂をもって小使となして、高麗国に遣わす。

〃 10月

U新羅、沙喙一吉漡金忠平・大奈末金沓世を遣わして、調を貢ず。

天武11年(682) 6月

V高麗の王、下部助有卦婁毛切・大古昂加を遣わして、方物を貢ず。

天武12年(683) 11月

W新羅、沙漡金主山・大那末金長志を遣わして、調進る。

天武13年(684) 4月

X小錦下高向臣麻呂を大使となし、小山下都努臣牛甘を小使となして、新羅に遣わす。

〃 10月

Y県犬養連手羅を大使となし、川原連加尼を小使となして、耽羅に遣わす。

天武14年(685) 11月

Z新羅、波珍漡金智祥・大阿漡金健勲を遣わして、政を請す。仍りて調進る。

以上から窺われるのは、この時期、朝鮮半島の新羅・高麗(高句麗、ただし668年に滅亡後、新羅領域内に再建された半独立国)および耽羅(済州島にあった独立国)から頻繁に朝貢の使者がわが国を訪れ、わが国もまた、これらの国々に使者をしばしば派遣していたことである。天武天皇の時代は、いわば積極外交の時代でもあった。

諸国の使者は筑紫や難波や飛鳥で饗応を受け、禄を賜給された。飛鳥においては、近年発掘された迎賓施設(石神遺跡)が利用されたことであろう。その南には飛鳥寺西方の広場があった。ここがもてなしの場となったこともあったであろう。

このように見てくると、冒頭が多禰・掖玖・阿麻彌三嶋の人々への賜禄や饗応はこの時代の積極外交の一環として位置づけることができる。

そして、天武天皇の時代に、三嶋など南島の中で王権の関心がとりわけ高かったのは、多禰であったらしい。というのも、書紀には以下のような記事が伝えられているからである。

I 天武6年(677) 2月

多禰嶋の人らに飛鳥寺の西の槻の下に饗す。

II 天武8年(679) 11月

大乙下倭馬飼部造連を大使、小乙下上寸主光父を小使として、多禰嶋に遣わす。仍りて、爵一級を賜う。

III 天武10年(681) 8月

多禰嶋に遣わせる使人ら、多禰国の図を貢ず。その国の京を去ること五千余里。筑紫の南海中に居り。髪を切りて草の裳きたり。粳稻常に豊かなり。一たび殖えて兩たび収む。土毛は支子・莞子および種種の海物等多し。

IV " 9月

多禰嶋の人らに、飛鳥寺の西の河辺に饗す。種種の樂を奏す。

ことに目を惹くのは、ⅡとⅢであろう。Ⅱは多禰嶋に対して大和王権から使節が派遣されたことを伝えるが、それは前掲のG・S・T・X・Yと同様、「大使・小使」によって構成される使節であり、多禰が諸外国と同様の「国」として扱われていることを示している。事実、この使節の復命を伝えるⅢでは、「多禰国」と表記されている。もっとも、このときの大使・小使の冠位が大乙下・小乙下とかなり低い冠位であることも見落としてはならない。

これらはいずれも天智3年(664)に制定された冠位制の冠位であるが、それらをかりに8世紀以後の大宝令の位階で表してみると、正八位下と従八位下である。これら大使・小使の帯位が明記されているG・S・T・Xと比較してみよう。

G (遣新羅使) 大使=小錦上 正六位上

副使=小錦下 正六位下

S (遣新羅使) 大使=小錦下 正六位下

小使=?

T (遣高麗使) 大使=小錦下 正六位下

小使=?

X (遣新羅使) 大使=小錦下 正六位下

小使=小山下 従七位下

Xの小使こそやや低いが、それでも遣多禰使の小使より格段に高く、全体として遣新羅使・遣高麗使が遣多禰使の冠位を大きく上回っていることは争えない。8世紀以後、遣唐使が復活するが、その遣唐使の帯位は同時代に派遣された遣新羅使や遣渤海使より総体的に高い。日本の対唐意識と対新羅・渤海意

識に上下の相違があったことを如実に物語る。同様のことは7世紀後半における対多禰意識と対新羅・高麗意識についてもいえよう。すなわち、遣使の帯位面から見て、多禰が新羅や高麗より低く見られていたことは明らかである。

そして、そのことは遣多禰使として任命された者たちの氏姓と遣新羅使・遣高麗使として任命された者たちのそれとの比較からもうことが出来る。遣新羅使・遣高麗使に任命された者の氏姓は大伴連氏・三宅吉士氏(G)、采女臣氏・当摩公氏(S)、佐伯連氏・小墾田臣氏(T)、高向臣氏・都努利臣氏(X)といった畿内の上級・中級の豪族であったのに対し、遣多禰使の場合は倭馬飼部造氏・上寸主氏といった下級伴造氏族や中小渡来系氏族にすぎないからである。ちなみに、帯位は欠くものの、遣耽羅使として任命された者も県犬養連氏・川原連氏(Y)であったから、耽羅もまた新羅・高麗と同格である。すなわち、遣使の氏姓面から見ても、多禰が新羅や高麗、さらには耽羅より低く見られていたことは明らかである。

この時期、多禰は国として扱われたが、新羅・高麗・耽羅よりはかなり低く見られていたとしなければならない。

しかし、その一方で、いわゆる南島の中でまがりなりにも「国」と看做されて遣使されたことが知られるのは独り多禰のみであることも注意すべきである。しかも、大和王権は、多禰を他国に比して一段低く看做しながらも、いささか腰矯めの姿勢で臨んだことが知られる。それは遣多禰使兩名に対し「爵一級を賜う」たことに表れている。後世の延喜式には「遣唐使随員の中に無位の者がいた場合、わざわざこれに位階を与えよ」(式部式)という規定がある。これは、王権を代表する使節の体面をいくらかでも高めて相手に侮られないようにしようとするものであるが、唐を相手の遣唐使ならともかく、遣多禰使にこれと相通

ずるような冠位の昇叙を行っているところが、低位・卑姓の遣使起用をしておきながら、完全に多禰を見下しきっていないことを物語っているのである。それはそもそも多禰を「国」として扱おうとしたことの中にも見て取ることができよう。

では、それはいったい何故であったか。当時の積極外交がそのようなものであったといえよう。しかし、そればかりではあるまい。思うに、次のような事情があったのであろう。それは王権の側にこの多禰についての情報が決定的に欠けていたという事情である。だからこそ、遣多禰使はⅢのように多禰に2年近くも滞在し、地図の作成、風俗・農業・産物の調査など、徹底的な情報収集に努めた。逆にいえば、当時の大和王権はそれまで多禰が飛鳥から五千余里離れた九州島の南海にあることすら、正確に把握していなかったのである。史料上の多禰の初見はⅠの天武6年(677)2月であるが、実際にもこの時初めて王権は多禰の人々に接し、初めて何がしかの情報を得たのであろう。Ⅱの同8年11月の遣多禰使の発遣は、このⅠを契機として考えるのが自然である。王権の把握していない南海の一嶋から飛鳥に來た人々はおそらくは故郷が豊かな粳米の嶋であることを通じにくい言葉で告げ、王権の関心をいたく呼び起こしたのであろう。豊かな稲作は政治権力の基盤である。地勢は小嶋であっても十分一つの国たりえる。現に耽羅も小嶋である。ただ、いくら国たりえるといっても、人々の様子から朝鮮諸国のように文物備わる国とまでは思われぬと値踏みしたのであろう。国扱いして遣多禰使を立て、使者の冠位昇叙までして体面に気を遣う一方で、低位・卑姓の者を使者としたのはさやうの値踏みによると思われる。それらはいづれも、多禰についての情報が決定的に欠けていたことによると考えられる。

しかし、このように7世紀後半において大

和王権が多禰についての情報を決定的に欠けていたということは、実は大変奇妙なことである。なぜなら、大和王権はこの多禰と正しく指呼の間にある掖玖については、すでに推古天皇の時代に交渉を持っていたからである。やはり、書紀からそのことを示す記事を列挙しよう。

①推古24年(616) 3月

掖玖人三口、帰化す。

②" 5月

夜句人七口、來れり。

③" 7月

また掖玖人二十口來れり。先後、あわせて三十人。皆朴井に安置せしむ。未だ還るに及ばずして皆死す。

④推古28年(620) 8月

掖玖人二口、伊豆嶋に流れ來れり。

⑤舒明元年(629) 4月

田部連名を闕くを掖玖に遣わす。

⑥舒明2年(630) 9月

この月、田部連ら、掖玖より至る。

⑦舒明3年(631) 2月

掖玖人帰化す。

とりわけ注目されるのは、⑤⑥であろう。その他のように、掖玖の人々が帰化してきただけではない。王権側も田部連某らを使者として掖玖に派遣し、1年半近くにわたって調査させている。この調査は、例の遣多禰使による多禰調査の、実に50年も前に行われているのである。無論、このときの調査は掖玖のみであって、隣が多禰には及ばなかったのであろう。しかし、重要なことは、その後半世紀を経ても、なお多禰は調査されていなかったということである。このことは何を意味しているか。

田部連某らが掖玖での調査を終え飛鳥に戻ってから50年、もしその間に王権側が官人を常駐させるか、在地の豪族を通じて支配するか、あるいは少なくとも頻繁な往来があったとすれば、隣嶋多禰についての情報が全く

王権側にもたらされぬということは、まことに考えにくい。とすれば、この間、王権は掖玖との恒常的な交渉を持たなかったのではあるまいか。書紀においても、先掲の①～⑦の後、掖玖に関連する記事は途絶え、再び登場するのは小稿冒頭にふれた天武11年(683)7月の三嶋の人々への賜禄の記事であった。

憶測するに、田部連某らの調査結果は王権側の食指を動かすようなものではなかったであろう。掖玖は多禰のような豊かな稲作の嶋ではない。もっとも、それは予想されたことではあった。田部連某らの調査以前に、掖玖から来た人々からすでに情報を得ていたはずだからである。上掲の掖玖関係の記事を見ると、微かにではあるが、王権が掖玖を低く見ていた気配が感じられる。それは①・⑦において掖玖人の来訪が「帰化」の語で表されている点にあらわれている。「帰化」とは君主の徳を慕ってその下に帰順することである。書紀は掖玖人を大和王権に当然帰順すべき人々と捉えているのである。それはこの嶋が政治権力の基盤たる稲作に向かない嶋であることを踏まえていると思われる。田部連某らの使者が「大使・小使」の構成をとっていないことも、多禰のように国として扱われなかったことを示すものであろう。王権は掖玖に対しては腰矯めの姿勢をとってはいない。

かくして、掖玖は多禰より50年も早く王権によって丹念な調査を受けながら、王権の版図としては久しく積極的に組み入れられることはなかった。一方、多禰に王権の調査の手が入ったのは遅かったが、豊かな稲作の嶋は王権の食指を大いに動かした。王権はこれを積極的に版図に組み入れようとする。そして、8世紀初頭の激しい在地の抵抗を招きつつも、やがて多禰を中心として隣嶋掖玖をも含めた行政区画としての「多禰嶋」が成立するに至るのである。

しかし、それでは何故、掖玖は多禰より50年も早く王権によって調査されたのであろう

か。しかも、積極的に版図に組み入れるに足る嶋ではないと予想されていたにもかかわらず、である。

私はこの掖玖がかつて常時ではないにせよ、遣隋使の寄港地となったことがあったのではないかと憶測する。

隋書倭国伝によれば、開皇20年(600)にわが国は初めての遣隋使を送り、以後、書紀によれば、推古15年(607)、同16年(608)、同22年(614)にも遣隋使派遣のことが見える。ところが、隋書琉求国伝によれば、大業4年(608)に煬帝から琉球慰撫の命を受けて渡琉した朱寛はその目的は果たせなかったが、当地より「布甲」を持って帰還した。そして、当時たまたま来ていた遣隋使にその「布甲」を見せたところ、その使者は「これは夷邪久国の人の用いる所なり」と言ったという。「夷邪久(いやく)」はすなわち掖玖である。

このエピソードは、小野妹子を始めとする608年の遣隋使らが掖玖の習俗を知っていたことを物語っている。しかし、その一方で、掖玖の本格調査の実施が⑤の舒明元年(629)であることから推せば、608年当時大和王権を構成する中央諸豪族が掖玖についての情報、それも「布甲」といった即物的な情報を広く共有していたとは考えにくい。結局、小野妹子らの掖玖についての知識は、彼らが実際に遣隋使として掖玖に寄港したことによって得られたものであろう。

よく知られているように、遣隋使・遣唐使のルートとしては、朝鮮半島東岸をゆく北路(新羅路)、九州島東岸沿いに南下しさらに南島伝い南下して東シナ海を横断する南島路、平戸や五島列島で風待ちし東シナ海を最短距離で横断する南路の三航路があった(森克己『遣唐使』)。通説によれば、遣隋使以降、初期の遣唐使についてももっぱら北路がとられ、南島路がとられるようになったのは、8世紀以降になってからである(やがて8世紀後半から9世紀にかけては南路がとられるようになった)

という。実際、608年の遣隋使が復路に北路をとったことは隋書倭国伝の記載から間違いない。しかしながら、全ての遣隋使が往路・復路ともに北路をとったことが証明されているわけではない。先にみた隋書琉求国伝のエピソードを根拠とすれば、すでに遣隋使の時期においても、場合によっては南島路をとった、あるいは結果的に南島路をとったのではあるまいか。そして、実はそのように考えないと、従来ほとんど問題とされていないが、何故①②③のような掖玖からの帰化が推古24年(616)といった時期に突如集中的に見られるかが解けないのである。

6世紀末から7世紀初頭、偶々ではあれ、遣隋使が南島路をとったことにより、大和王権の人々が掖玖に寄港することになった。南島路をとれば、寄航先は自然多禰となる。これによって、遣隋使の側にも掖玖についての即物的情報が得られたが、一方掖玖の人々にも大和王権の人々と接することにより、大和王権に対する思慕や憧憬の念を持つ者が現われたであろう。掖玖は豊かな稲作の嶋ではない。王権を代表する者として体面を重んじた、おそらくは仰々しい遣隋使らの姿に圧倒され、彼らの背後に大和王権の富や強さを見た者もいたであろう。遣隋使らとの接触はこの嶋の人々に離嶋と帰化を促すことになったと考えられる。

掖玖が常時ではないにせよ、早く遣隋使の寄港地となったことにより、在地社会は一種のカルチャー・ショックを被り、離嶋・帰化志望者が出現した。復路の遣隋使船に便乗して首尾よく飛鳥にまで達した者がいたかもしれない。また、④のように、離嶋して本土に渡らんとするも、黒潮に遠く流されてしまった者もいたであろう。

ともあれ、このような掖玖からの離嶋・帰化の傾向を受けて、王権は掖玖の徹底調査に取りかかる。それはこの傾向に掖玖の在地社会の動揺を看取したからではなかろうか。こ

れ以前においても、①では「帰化」としながら、③では①の3人を含む掖玖人30人について、掖玖に「未だ還るに及ばずして皆死す」としていることが注意される。これは王権側が一旦受け容れた帰化掖玖人たちの送還を決定していたことを示す。掖玖在地社会の動揺を憂慮し始めていたのであろう。おそらく王権には、政治軍事情勢により大きく変動する朝鮮半島沿岸を通らねばならぬ北路の外に、今一つ航路を確保しておきたいという願望が早くからあったにちがいない。南島路も古くから想定されていたのではあるまいか。たまたまではあれ、寄港した掖玖やそこから離嶋・帰化した人々との交渉により、掖玖を寄港地とする南島路を本格的に検討するため、田部連某らによる在地社会の動揺をも含めた掖玖の徹底調査が企図される。そこには後の多禰ほどには積極的ではないにせよ、掖玖を版図に組み入れようとする意図も、やはり忍び込ませていたであろう。

しかしながら、その調査結果はおそらく王権を失望させるものであった。ここを安定的な寄港地とすることは断念され、またあえてその版図に組み入れようとする領土的野心もさほど刺戟しなかったのである。

かくして、掖玖には王権の官人が常駐することもなく、在地の豪族を通じて支配することもなく、また遣隋使・遣唐使の寄港地化して頻繁な往来が行われることもなかった。王権の人々との接触が絶えるにつれて、掖玖の人々の離嶋・帰化の動きもしだいに沈静化する。掖玖の人々が史上に再登場するのは、隣嶋多禰が王権の注目を受け、遣多禰使による調査が終わって、王権がこの嶋を中心に多禰・掖玖両嶋あわせて版図に組み入れようとし始めてからである。